[研究論文]

シュタイナーとゲーテ『メールヒェン』
――『メールヒェン』解釈に秘匿されたシュタイナーの人間形成論 ――

井 藤　　元

0．はじめに

本研究は、ルドルフ・シュタイナーの思想構造を明らかにすべく、彼のゲーテ論（「メールヒェン論」）を読み解くことを試みるものである。

シュタイナーは、彼独自の霊学的観点から『メールヒェン *Das Märchen*』（1795）解釈を行っており、生涯に亘って、論文、講演を通じて繰り返しその解釈を試みた。彼は1910年には『メールヒェン』と密接な関連を持つ自作の劇『神秘劇 *Mysteriendramen*』を創作している[1]。

ゲーテの『メールヒェン』は、アレンが指摘しているように、シュタイナーにとって、人智学の基盤として位置づくものであった[2]。彼は、自身の思想の根底に位置づけるべき理念を『メールヒェン』のうちに読み取り、自らの思想を投影しつつ、解釈を遂行している。シュタイナーは霊学的観点をもってはじめて、ゲーテ文学に秘められた意味が明らかになると考えていた。

筆者は、別稿「シュタイナーのゲーテ『メールヒェン』論 ―― ゲーテ、シラー、シュタイナーの思想的邂逅 ――[3]」において、シュタイナーが思想研究者から霊的指導者へと歩みを展開させる直前に発表した「メールヒェン論」（「ゲーテの黙示 *Goethes geheime Offenbarung*」、1899年）に焦点を当て、その分析を試みた[4]。「ゲーテの黙示」において、シュタイナーは『メールヒェン』をシラーの『人間の美的教育についての書簡 *Über die ästhetische Erziehung des Menschen*』（1795以下、『美的書簡』と略記）に関連づけて解読し、ゲーテ思想の根底に潜在する枠組みを、シラー的枠組みを用いて抽出している。シュタイナーが霊的指導者へと本格的に歩み始める直前であることもあって、「ゲーテの黙示」の段階での彼は、『メールヒェン』、『美的書簡』という二重の隠れ蓑に身を包みつつ、慎重に自身の思想を語っていた。けれども、霊的指導者となって以降、彼は霊学的視点から自由に解釈を試みている。

> 「『メールヒェン』におけるすべての特質、すべての文章が重要である。その作品を人がより深く学べば学ぶほど、より一層全体が理解でき、明確になってくる。そして、この『メールヒェン』の秘教的な核心を描き出す人は、同時に神智学的な世界観の本質を与えられる[5]」。

『メールヒェン』を読み解くことが、すなわち神智学的思想内容の解明に等しいという彼の主張のうちには、もはや転回前夜に慎重に解釈を行っていた彼の姿は見られない。彼はしばしば、霊学的観点をもってはじめて、『メールヒェン』の内実が明らかになると述べているが、そこには、自らの思想の妥当性に対する自負を見てとることができる。解釈を通じて、自身の思想の正当性を証明しているという印象さえ受けるのである。

さて、本稿が焦点化するのは、「ゲーテの黙示」以降、すなわち、霊的指導者となって以降の「メールヒェン論」である。「ゲーテの黙示」は、シュタイナーが霊的指導者へと歩を進める上での端緒を開いたものであるが故に、極めて重要である。しかしながら、それは転回以前の論文であり、また、小論であるため、そこで彼の解釈が十全に達成されたわけではない。この点に関し、シュタイナーは自伝の中で以下のように回顧している。

> 「1899年8月28日、ゲーテ生誕150年の日に、『雑誌』に「ゲーテの黙示」という題でゲーテの『メールヒェン』についての論文を書いたときに、私のなかに生きている秘教的なものを公けに示そうという意志が私に押し寄せた。―― その論文は確かに、まだあまり秘教的ではなかった。私が提供した以上の

ものを読者に要求することはできなかった[6]」。

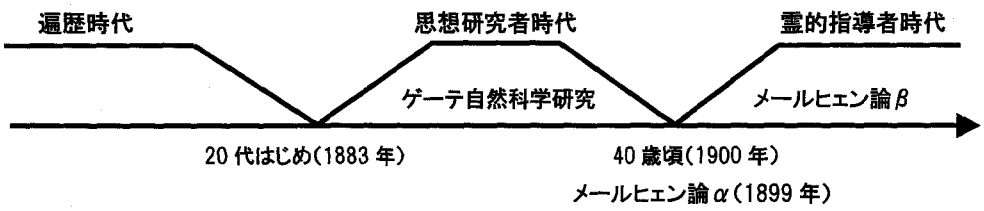
シュタイナーは転回以降も繰り返し、『メールヒェン』解釈を行った。そこでは、「ゲーテの黙示」の段階では論じられることのなかった、秘教的側面が取り上げられている。霊的指導者時代の解釈には、シュタイナー思想が色濃く映し出されているのである。そこで、本稿では転回以降の「メールヒェン論」を取り上げ、シュタイナーがいかにそれを読み解いたかを明らかにしたい。

その際に留意すべきは、本論考があくまでも、シュタイナー自身の思想構造を明らかにすべく、「メールヒェン論」を読み解くものであるという点である。『メールヒェン』は、謎に満ち溢れ、いかようにも解釈可能なテキストである為、解釈者達はしばしば、そこに自らの思想を投影してきた。このことは、シュタイナーの場合も例外ではなく、その解釈を通じて、彼は独自の理念を間接的に語っている。本研究では、この点に「メールヒェン論」の意義をみとめ、これをシュタイナーの思想構造を浮き彫りにする試金石とみなす。事実、シュタイナーは、解釈の中で、人間の魂の発達の過程を描き出しており、これはまた、人智学的な人間形成過程とパラレルのものである。つまり、「メールヒェン論」は、シュタイナー思想をゲーテ的に語り直す可能性をもたらす装置として位置づけられるのである。

尤も、「メールヒェン」論を通じてシュタイナー思想の全体像を網羅的に解明できるわけではない。人智学的諸理念は、ゲーテ的世界観を大きく超え出る要素を多分に含んでおり、それらをあますところなく捉えることは不可能である。従って、ゲーテによってシュタイナー思想をどこまで語ることができるか、その限界を見定めることも、本研究の課題の一つとなる。よって、ゲーテを超え出て、シュタイナー思想そのものに深く立ち入らねばならない問題に関しては、大綱のみの論述に留めた。

本論考では、以下「ゲーテの黙示」の段階では明らかにされなかった諸問題を取り上げ、シュタイナーの思想構造を読み解いていきたい。霊的指導者として歩を進めるにつれて、彼の解釈は、確かに秘教的色合いを強めていく。けれども、（結論を先取りすることとなるが）解釈がより霊学的色合いを増しても、1899年時点で提示された基本構図が質的に変更されるわけではない。従って、転回以降の解釈と転回直前のそれを比較し、両者に通底する構図を見出すことで、シュタイナー思想に一貫して流れる根本構造を抽出することが可能となる。

考察を進めるにあたって混乱を避けるため、以下の論考においては、次のように用語の統一を図る。すなわち、転回直前の「メールヒェン論」（「ゲーテの黙示」、1899年）を「メールヒェン論」α（もしくはα）と呼ぶ。そして、霊的指導者時代に、主に講演という形式で展開された諸々の解釈を「メールヒェン論」β（もしくはβ）と呼ぶことにする。



まずはその本題に入る前に、シュタイナーのゲーテ研究における「メールヒェン論」の位置づけを確認し、その上でαの内容を簡単に振り返り、しかるのちに、βの分析へと移る。そして最後にα及びβの異同を確認し、シュタイナー思想に潜在する基本構図の抽出を試みたい。

1．シュタイナーのゲーテ研究における「メールヒェン論」の位置づけ

世紀転換期以前、20代半ばから30代にかけてのシュタイナーは、霊的指導者となって以降（40歳以降）の彼とは異なり、思想研究者として堅実な研究を数多く残している。そこではオカルト的側面は影をひそめ、精力的に思想研究を推し進めている。シュタイナーは、ゲーテ研究者であるシュレーアーの推薦で、キュルシュナー『ドイツ国民文学叢書』中のゲーテ自然科学論文の編集の仕事を依頼されて以降、1886年には処

女作『ゲーテ的世界観の認識論要綱』を出版し、1897年には彼の初期のゲーテ研究の集大成ともいえる『ゲーテの世界観』を世に送り出している。そうした一連の著作において、彼はゲーテのうちに自身と同一の思想的傾向性を見出し、ゲーテについて論ずる中で、自身の思想を行間に潜ませていた。1923年に記された『ゲーテ的世界観の認識論要綱』、「新版の序」において、彼は、ゲーテ研究の過程で、自身の世界観がゲーテの世界観における認識論に合致することが明らかになったと告白している[7]。そして、シュタイナー自身が述べているように、思想研究者時代のゲーテ研究は、彼の思想的地盤として位置づくものであった[8]。

しかしながら、思想研究者から霊的指導者へと歩を進める過程で、シュタイナーは、自身のゲーテ研究の問い直しを迫られることとなる。その契機となるのが、ゲーテ『メールヒェン』研究であった。ドイツ・ロマン派における創作メルヘンの祖といわれるこの作品は、謎に満ち溢れており、多様な解釈を許すが故に、多くの解釈者を悩まし続けてきた難テキストである。21歳でこれをはじめて手にしたシュタイナーは、その内容を一切理解できなかったという[9]。けれどもゲーテ自然科学研究を通じて、『メールヒェン』に込められたゲーテの意図、そこに潜在する秘密が、次第に開示されることとなった。そしてゲーテ自然科学論文の研究に従事していたシュタイナーにとって、この作品は、彼を次なる課題・段階へと導くものとなる。シュタイナーは自伝において当時を次のように回顧している[10]。

> 「私にとって重要だったのは解釈ではなく、この『メールヒェン』の研究の及ぼす心霊体験への刺激であった。この刺激は私のこれ以降の精神生活にも影響を与え続け、後に私が創作した神秘劇にまで及んでいる。しかしながら、私が取り組んでいたゲーテ研究にとっては、この童話から多くを得ることはできなかった。それというのも、ゲーテはこの作品を書く時、半ば無意識のうち、心的生活の内的な衝動に駆りたてられて、彼の世界観を自ら超え出てしまったかのように見受けられるからである。私は大きな困難に直面した。すなわち、私はキュルシュナーの『ドイツ国民文学叢書』中のゲーテ解釈を、私が最初に着手したままのスタイルで続けざるをえなかったが、しかしそれでは私自身が満足できなくなったのである[11]」。

シュタイナーは、『メールヒェン』分析を通じて、それまでのゲーテ研究の領域を超え出る問題に直面した。この作品は、ゲーテ自然科学研究の枠内では把捉することが困難な事態を提示していると感じられたのである。彼は、転回の直前（1899年）に「メールヒェン論」αを世に送り出した。そしてその翌年（1900年）、ブロックドルフ伯爵夫妻（ドイツにおける神智学運動の中心人物）が主催するサークルで『メールヒェン』について講演を行った。彼はそれを自身の思想を語った最初の場、出発点と位置づけている[12]。そして、その後も彼は、自身の解釈について繰り返し講演を行った。

2.『メールヒェン』の粗筋

シュタイナーの解釈を読み解く前に、まずは物語の内容を簡潔にまとめておこう。粗筋は以下のとおりである。

物語は皆の憧れの対象である美しい百合姫の住む国にある渡し守の小屋に、ある晩、二人の鬼火が現れ、渡し守に河を渡してもらう場面から始まる。向こう岸についた彼らはやがて、百合姫の宮殿が河の反対側（すなわち自分達がもといた場所）にあることを聞かされる。しかし渡し守には逆方向に人を渡すことが許されていない。再び河を越すには、真昼時に緑色の蛇のかける橋を渡るか、夕方巨人の影に乗って渡るかしか方法はない。

さて、鬼火は渡し守に渡し賃として金貨を払おうとしたのだが、大地からとれた野菜以外は受け取らない彼は、金貨を岩間に投げ捨ててしまった。折り良くその場に居合わせた緑色の蛇はその金貨を飲み込む。金貨を消化することによって体中が輝きだした蛇は、その光によって、以前から気になっていた地下にある薄暗い聖堂を訪れることを決心する。地下聖堂で蛇は四人の王の鋳像（金、銀、銅、及びそれらの合金でできた王）と一人の老人に出会う。そこで会話が交わされた後、蛇が自らの知っている秘密を老人に打ち明けると、老人は突如大声で、「時が来た」と叫んだ。老人はこの後急いで帰宅し、妻に命じて、救いの近づいたこと、その時が来たことを対岸の孤独な百合姫に知らせに行かせる。蛇もまた同じ目的で彼女のところへい

そぎ、「橋についての予言が実現しました」といって姫をはげます。

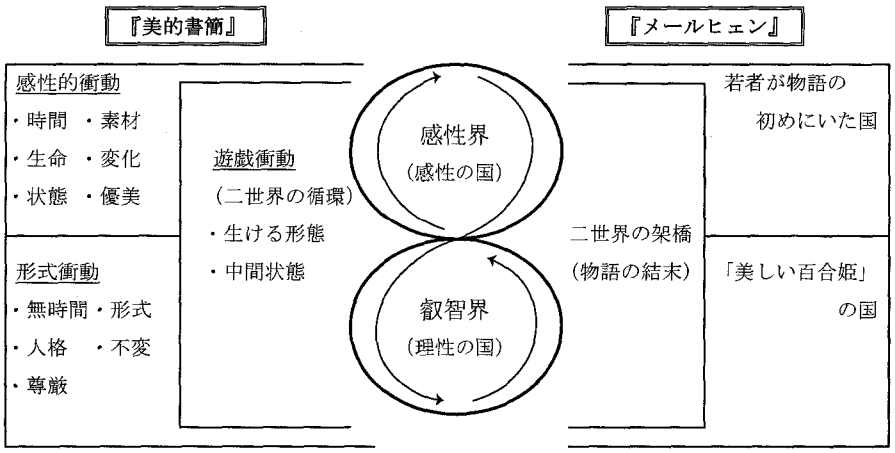
百合姫は死んだものを生き返らせることはできるが、彼女にふれる生き物はすべて死んでしまう。そして今も蛇のあとからやってきた若い皇子が我を忘れて彼女に触れて死んでしまう。蛇、百合姫、鬼火らは老人に導かれ、皇子の復活のために働く。その後、百合姫が蛇と皇子の死体に同時に触れると、皇子は息をふきかえした。途端に蛇は多くの宝石に変形し、美しく輝く橋となった。河の上に聖堂が建てられ、若者は金、銀、銅、三人の王から賜物を授かる。そして聖堂の中で若者と百合姫との結婚が成就する。最後に、美しく完成された橋の上を多くの人馬が楽しげに往来している光景が描かれ、『メールヒェン』は幕を閉じる。

3．思想研究者時代の「メールヒェン論」──「メールヒェン論」αの概要

では、シュタイナーはこの物語をいかに読み解いたか。βの考察を行う前提として、まずはαの内容を振り返っておくことにする。紙幅の都合上、その詳細な内容を記すことはできない為、概要のみまとめることにする。尚、αの詳細な内容については先に挙げた拙稿「シュタイナーのゲーテ『メールヒェン』論──ゲーテ、シラー、シュタイナーの思想的邂逅──」を参照していただければ幸いである。

αで論じられていた内容を図式的にまとめると以下のようになる。

・『メールヒェン』、『美的書簡』における二世界の関係図式



中央八の字型の図式において、上の円は感性界、下の円は叡智界を示しており、両世界はそれぞれ独立した世界である。そして図式の左側は『美的書簡』（衝動論）の構造を、右側は『メールヒェン』の構造を示している。

左側『美的書簡』に関して、感性界で「感性的衝動（der sinnliche Trieb）」が、叡智界で「形式衝動（der Formtrieb）」が作動する。そして、上記モデルでは、シラーが理想として掲げる「遊戯衝動（Spieltrieb）」の作動状態を、二つの円の相互を行き来する矢印で示す。感性界に留まりつつ叡智界へと飛翔するという意味で、「遊戯衝動」の作動状態は、論理的に考えるならば矛盾した状態といえるが、それをあえて図示するならば、二世界を往来する矢印が示すような、矛盾を孕んだダイナミックな動きとして示しうる[13]。

シュタイナーは、こうした『美的書簡』の構図が『メールヒェン』のうちにも潜在していると考えた。彼は、『メールヒェン』における「百合姫の国」とその対岸の国とを『美的書簡』に関連させた。「百合姫の国」が「形式衝動」の働く世界、すなわち叡智界であり、その対岸にある国が感性界（「感性的衝動」の働く世界）だというのである。両国の間を流れる河がそれらを分離している。我々は感性界において因果法則に従って生きていかねばならず、そうした因果の法則は、人間を超感覚的なものから切り離してしまう。シュタイナーは『メールヒェン』においても、『美的書簡』同様、相反する原理に基づく二世界が前提になっている

とし、さらには物語の最終シーンにおいて、両世界の絶えざる往還が描かれていると解釈する。物語の登場人物である若者と百合姫が聖堂の中で結ばれ、また、蛇の自己犠牲によって誕生した橋によって、物語クライマックスでは感性界と叡智界が自由に往来可能となる。感性の国と理性の国の交流が達成されるのである。すなわち、両国の架橋はシラーにおける「遊戯衝動」の作動状態と同一の事態を描いたものだというのである[14]。

「メールヒェン論」αの概要は以上のようなものである。『美的書簡』と『メールヒェン』の思想的連関を解き明かすことが、そこでの中心課題であった。シュタイナーは自身の思想の根底に位置づけるべき構図を、ゲーテ、シラー、両者の思想圏のうちに見出した。

しかしながら、先に引用した通り、αは、「まだあまり秘教的なものではなかった」。転回直前に書かれていることもあり、そこでは、未だ彼特有の霊的思想内容が本格的に叙述されてはいないのである。この意味において、αはあくまで、人智学的人間形成論の大枠の把捉を可能にするものでしかなかった。人智学特有の様々な問題がそこで十全に解き明かされているわけではないのである。

4．霊的指導者時代の「メールヒェン論」――「メールヒェン論」β

4－1．三世界について

では、霊的指導者時代のシュタイナーは『メールヒェン』をいかに読み解いたか。彼は霊学的観点を導きいれることによって、その構図を三世界から成り立つものと捉えている。

> 「その中（『メールヒェン』註：筆者）で、我々は人が生きている三つの国、すなわち、物質界（Physischewelt）、魂界（Seelenwelt）もしくはアストラル界（Astralwelt）、精神界（Geisteswelt）の象徴を見出す[15]」。

αでは『メールヒェン』の世界は、二世界から成り立つものと捉えられていた。しかしながら、βでは、それら二世界の間に魂界（アストラル界）が加えられている。シュタイナーによれば、この魂界（アストラル界）は、二世界の間を流れる河によって象徴されており、魂界（アストラル界）の象徴は水であるとされる[16]。

物語の構造を三世界から成り立つものと捉える視点は、彼独自の霊学的観点を背景に据えている。シュタイナーは、宇宙を物質界、魂界、精神界の三世界から成り立つものと捉え、これを基本構図とした[17]。その三世界がいかなるものであるかについて、主著の一つである『神智学』の解説を参照しよう。

彼によれば、人間は身体（Leib）、魂（Seele）、霊（Geist）の三層をなしている。そして人間は周囲の世界とその三層に応じて、三重に関係しているという。

> 「身体とは……周囲の事物を、人間に示すところのものを意味する。魂とは、人間を事物と結びつけ、人間に気に入る、気に入らない、快と不快、喜びと苦しみを感じさせるところのもの、と解されるべきである。霊とは、……事物を「いわば神的な態度」で観るとき、彼に開示されるものを意味する[18]」。

身体の置かれている世界、すなわち物質界は、時間性の領域であり、感覚によって捉え得る世界である。霊の世界、すなわち精神界は、永遠性の領域である。その中間にある魂の世界（魂界）には、時間性と永遠性、無常性と不死性が共に含まれている。「日常生活においては魂は専ら時間性に拘束されているが、自覚に達した魂は時間性を超克し、永遠の領域に入る。死すべき運命を持ちながら常に不死性を内蔵し、自己を永遠の価値の世界へ高めることができるところに人間の神秘がある[19]」。魂を通じて、我々は現象に触れて好感と反感、快と不快を経験する。そしてそれにより、我々は我々自身の世界を構築するのだという[20]。

αでは、シラー的二元論に引きつけて考察がなされていた為、ここで前提とされている三世界のうち、物質界と精神界のみが焦点化されていた。そこに魂界が加味されることにより、シュタイナーの解釈は秘教的色合いを強めることとなる。

尤も、本研究はあくまで、ゲーテ的世界観の中でシュタイナーの思想構造を浮き彫りにさせることを本務

としているので、これ以上彼の世界観を検討することは避ける。ここではシュタイナーが、彼の思想的発展と相関して『メールヒェン』を三世界から成るものと再解釈したという事実だけを確認し、先を急ぐことにする。

4－2.「自由」獲得の前提としての自己変容

さて、我々は皆、自ら関与することなく、精神界から感覚界へと導かれる。このことは、渡し守が我々を感覚界へと渡す場面に象徴されているという。我々は、精神界への願望を持っているのであるが、渡し守は我々を再び向こう岸（精神界）へと渡すことができない。

> 「我々は我々自身の意志によらずに、こちら側にやってくるのだが、我々は同一の道を通って再び戻ることはできない。我々は我々自身精神の国へ戻る道を作り上げなければならない[21]」。

精神界から感覚界への行程が一方通行であることはαにおいても記されていた。ところが、渡し守の渡す河自体にも霊学的意味が付与されたことにより、解釈はより詳細なものとなる。

感覚界へと渡された鬼火達は、渡し賃として金貨を支払おうとする。渡し守は、鬼火達が手渡そうとする金貨を拒絶する。このことは何を意味するのであろうか。シュタイナーは「金」を「学識 Weisheit」の象徴として読み解いている。

渡し守は、もし金貨が一枚でも河に落ちてしまったならば、たちまち河は氾濫をおこすだろうと忠告する。シュタイナーはこの事態を、人間が浄化を経ないうちに「学識」を摂取することに対する危険性として読み解く。

> 「その河は、魂の生活（Seelenleben）である。人間の本能、衝動そして情熱の全体である。もし、学識（Weisheit）としての金が軽率に情熱の河の中に投げ入れられるならば、魂は混乱へと至り、かき乱される。ゲーテは、人は常にまず初めに、学識の受容に向けて成熟するために、カタルシス、純化を成し遂げねばならないと指摘している。なぜならば、もし、学識が浄化されていない情熱にもたらされるならば、情熱は狂信的になり、その後、人は低次の自我のうちにとらえられたままとなるからである[22]」。

人間の熱情に関わる魂界に、安易に学識（金）がもたらされることは、忌むべき事態とみなされるのだ。我々は鬼火のごとく、金を手軽に獲得し、それを至る所で撒き散らすべきではなく、それは経験を通じて十分に我々のうちに蓄えられるべきである。

ここで注意すべきは、シュタイナーにとって、金（Weisheit）自体が悪しきものとみなされているわけではないという点である。鬼火とは対照的に、金（Weisheit）に対して適切な態度をとるのが蛇である。蛇は金を体中に行き渡らせ、これにより自らの体内を輝かせる。金に対するそうした態度こそ、我々が取るべきものとされるのである。

シュタイナーによれば、鬼火の有する金は、生きることへと緊密に結びつけられねばならない。概念を学んでも、それを生きることへと移せない者は、料理本を暗記するまで読んだものの、実際に料理することができない者に似ている[23]。Weisheit は「学識」を意味すると同時に「知恵」をも意味するように、我々は知識を「知恵」へと結実させねばならないのである。

例えば、ゲーテの「原植物」も、もしそれが抽象的な概念としてのみ打ち立てられるならば、生命を殺すことになりうる[24]。シラーとの有名な会話が裏づけている通り、ゲーテにとって「原植物」は現実を捉えるための生きた概念であった。

では、ここでいうところの金とは、より具体的には何を意味するのであろうか。シュタイナーは鬼火を「科学」の象徴として読み解いている。物語クライマックスにおいて、聖堂へと続く門が開かれる。その門を開くことができるのが、他でもない鬼火たちなのであった。

「ゲーテは科学を軽視しない。彼は科学が叡智の聖堂を開けると知っていた。彼は人がすべてのことを調べ、すべてのことを純粋な認識において判断し、評価するに違いないと知っていた。そして、人は科学なしでは、最も高次の叡智の聖堂に入り込むことはできないと知っていた。……彼は知識を物理学、生物学など至る所で探した[25]」。

勿論、ここで想定されている科学とは、事象を分析的に把握し、生ける自然を静的に捉えた「灰色の自然科学」、近代科学のことではない。「緑の自然科学」とも評される、ゲーテ自然科学のことである[26]。シュタイナーは、先に見たとおり、思想研究者時代にはゲーテ自然科学研究に従事していた。そうした研究は、霊的指導者時代の彼の思想と矛盾するものではなく、その思想的基盤を形成するものであった。彼にとってゲーテ的自然科学は、超感覚的世界へと我々を導く不可欠の存在なのである。

さて、金を正しく摂取することは、自己変容（ひいては「自由」の獲得）の問題と無縁ではない。シュタイナーはこの点について以下のように述べる。

「利己主義的な学識は、無意味ではない。それは必要不可欠な通過すべき段階である。学識によって養われることによって、そして真の認識の黄金を行き渡らせることによって、人間のエゴイズムは克服されうる。そうすれば、この学識は、聖堂の扉を開けることに役立ちうる[27]」。

シュタイナーは、『メールヒェン』を、感覚的世界に導き入れられた我々が、再び精神界との関係を取り戻す（百合姫との結合）プロセスとして読み解いているのだが、「金」は、そのための不可欠のファクターとなる。

それでは、そもそも何故『メールヒェン』において、百合姫との結合が切望されるのか、そしてその結合を経て何が獲得されるのだろうか。シュタイナーは、百合姫との結合を高次の自由の獲得状態として解釈した。そして、百合姫との結合を果たすために、自己の質的変容が必要とされるのである[28]。

シュタイナーにとって、そしてシュタイナー教育にとって、自由の獲得は人間形成の最重要課題である。彼は、「人間の意志は自由か不自由か」という問いを問いの立て方として不適切とみなし、「不自由な自然意志から、自由な意志への道をいかに獲得するか[29]」という問題こそを問うべきだとした。不自由な状態から自由な状態への移行に際し、我々は自己の質的変容を求められる[30]。

「人が得ようと努めうる最も高次のもの、人がそれへと変容すべき最も高次のものを、ゲーテは百合姫のシンボルで表している。それは我々が最も高次の知恵と呼ぶものと同じ意味を持っている。……魂の諸力の最も高次の力、意識の最も高次の状態、そこにおいて人は、自由となるだろう。なぜならば、彼は、彼の自由を乱用しないからである[31]」。

物語の内容へと話を戻そう。蛇は、金を摂取したことで体中が輝きだした。蛇はその光が消えぬうちに、地下聖堂へと赴くことを思い立つ。シュタイナーによれば、この聖堂は、「すべての時代の神秘の神殿のシンボル[32]」だという。ここで蛇はランプを持った一人の老人に出会う。

不思議なことに、老人のランプは、暗闇では光を発しない。それは既に光があるところでだけ光を発するという特殊な性質を持っている。このことは何を意味するのであろうか。

老人のランプは、物語において光り輝く。なぜならば、蛇が金を摂取したことで自ら光り輝き、その光で地下聖堂を照らしているからである。蛇の発する光によって、聖堂内が照らされることにより、老人のランプは輝きだす。

シュタイナーによれば、「秘められた認識 okkulte Erkenntnis」と呼ばれるものがこのランプを持った老人によって象徴されているという。「秘められた認識」の光は、それを受け取る準備ができていない者を照らすことはできない。これはゲーテの言葉、「もし目が太陽の性質を持っていなかったら、光を感覚することなどできないであろう」と同義である。蛇は既にそれを受け取る準備ができているため、老人のランプを輝かせることができたのである。

そしてその後、蛇がランプを持った老人にある秘密を打ち明けた時、老人は「機は熟したり」と叫んだ。では、その秘密とは何なのであろうか。シュタイナーは、これを蛇が自己犠牲への意欲を持ったこととして解釈する[33]。この自己犠牲は、決して我々の存在そのものを破棄することを意味しない。自由を獲得するため、すなわち高次の自己として再生するため、我々が低次の自己を捨て去ることを意味する。

ここにおいて、不自由な状態にある自己、すなわち低次の自己に死をもたらし、高次の自己として再生させる存在が百合姫である。美しい百合姫は、生けるものすべてをその手で触れることによって殺してしまう。が、彼女は命が果て、死んでしまったものすべてを生き返らせることができる[34]。百合姫のこの不思議な性質は、『西東詩集』中のゲーテの言葉、「死して成れよ！」をもって、解釈が可能となる。すなわち、百合姫は、人間の再生に寄与する存在とみなされるのである。物語に登場する若者は、百合姫に触れることによって死に至るのだが、これは若者の低次の自己の死を意味していた。若者は物語クライマックスにおいて、高次の存在として復活するのである[35]。

4－3．高次の自己の誕生

若者が高次の自己として復活するということは、より具体的にはいかなる事態をさすのだろうか。この点については、物語に登場する四人の王の解読のうちに示されている。

蛇は地下聖堂で四人の王の鋳像に出会う。聖堂の四つ角にそれぞれ、金の王、銀の王、銅の王、そしてそれらすべての金属を混合して鋳造された王がいる。蛇はこれまで、彼らを視覚的に捉えることができなかったが、金を摂取し内部から輝くことによって、その光で彼らを見ることができるようになる。シュタイナーによれば、金の王、銀の王、銅の王は、それぞれ人間のより高次の原理を表しており、第四の王（合金の王）は、人間の低次の原理を示しているという[36]。シュタイナーの解釈を見ていこう。王たちの解釈のうちにも、彼の霊学的視点が如実に表れ出ている。それぞれの王はいかに解釈されているか。

シュタイナーは三人の王を、それぞれ金の王＝思考（英知）の象徴、銀の王＝感情（信仰・美）の象徴、そして銅の王＝意志（力）の象徴として読み解いている。

そして、四番目の王（三種の金属の混合で出来ている）は思考、感情、意志の僕であり、人のこころの代表である。つまり人は低次の段階において、三つの力の主ではなく、それらが混在している状態にあるのだ[37]。

> 「彼［第四の王　註：筆者］は低次の本性の象徴であり、その中で、高貴な諸力、知恵と美と強さの気高い諸力が、混沌の中にあるがごとく未整理で、無秩序に働いている。高度に発達した精神生活の中で生きているこれら三つの力は実際、低次の本性において現存しているのであるが、混沌としており、調和していない。この四番目の王は、現実世界の国におり、知恵と美と力の無秩序な混合でできている[38]」。

物語クライマックスにおいて、若者は金、銀、銅それぞれの王から賜物を授かる。この若者とはいかなる存在なのであろうか。シュタイナーによれば、若者は「最も高いものを求めて努力する人[39]」である。

浄化を経た後の若者は、もはや思考、意志、感情が混在していない。それぞれが独立し、均衡を保っている。金、銀、銅、三人の王が立ち上がり、それと同時に第四の王（三種の金属の混合によって造られた像）は瓦解する。シュタイナーは第四の王が崩れ去るという事態を、低次の自己の死滅として読み解いている。かくして、三つのより高次の原理が若者の中で互いに調和的に働く。

さて、上に見たように、三人の王は、金の王＝思考、銀の王＝感情、銅の王＝意志として読み解かれていたが、βでは、そうした解釈に加えて、シュタイナー特有の人間観が付与される。

すなわち、金の王＝マナス（Manas）、銀の王＝ブッディ（Buddhi）、銅の王＝アートマ（Atma）として解読されているのである[40]。ここでアートマ、ブッディ、マナスと呼ばれているものは、シュタイナー独自の人間観から導き出されたものである。よく知られているように、シュタイナーは人間を、肉体（Physischerleib）、エーテル体（Atherleib）、アストラル体（Astralleib）、自我（Ich）の四要素からなるものと考えた。そして肉体、エーテル体、アストラル体は、浄化されることによって高次の存在となり、それぞれ、霊人（Geistesmensch）＝アートマ、生命霊（Lebensgeist）＝ブッディ、霊我（Geistselbst）＝マナ

スへと変容すると考えられていた。

そうしたシュタイナーの人間観は、極めて特異であり、我々の常識的観念を大きく超え出るものである。人間をエーテル体、アストラル体などから成るものとみなすことだけでも異質であるが、その上、そうした諸要素を浄化することが目指されるのである。彼は物語のクライマックスを、人間のうちに、霊我（マナス）、生命霊（ブッディ）、霊人（アートマ）が呼び覚まされた状態として読み解いている。

我々はシュタイナー思想の中心部へと深入りしすぎたようだ。上に挙げた問題について、さらなる検討を試みることは、明らかに本研究の射程圏外である。本論考は、あくまで、ゲーテ的世界観の枠内で語りうる範囲に限って、彼の思想構造を明らかにすることを課題としている。従って、これ以上の深入りは避けるべきである。ここでは、シュタイナーが自身の人間観を解釈のうちに極めて直接的に投影していたことを指摘するに留めることとする。

5.「メールヒェン論」αと「メールヒェン論」βの異同

本節では、「メールヒェン論」αとβの比較を通じて、両者の差異を確認し、加えて双方に通底する構図を導き出したい。

まずは両者の差異について。両者の決定的な相違は、『メールヒェン』の構図の把捉に関する決定的差異であった。αでは、シラー的枠組みに依拠し、相対立する二世界によって描き出された構図は、βでは人智学的世界観に基づき、三世界から成り立つものと捉えられていた。

βでは、もはやシラーとの思想的連関に重点が置かれることはない。『美的書簡』との構造的一致については指摘されるが、解釈が秘教的色合いを帯びていくに従って、シラーとの関連は強調されなくなる。

けれども、それではシラー的構図が消滅してしまったかと言えば、否である。人智学的思想に基づき、物語の構図が三世界から捉えられることになっても、依然としてシラー的二元論は潜在している。βに至っても、超感覚的世界の原理（百合姫）との結合というモチーフが消えたわけではない。そこでは人智学的世界観がより深く投影されているとみるべきであり、基本構図自体が本質的に変更されたわけではないのである。

このことを端的に物語っているのが1918年に発表された論文「「緑の蛇と百合姫のメールヒェン」を通じて開示されたゲーテの精神様式」である。この論文は、αの加筆・修正論文であり、α（1899年）からおよそ20年の月日を経て発表されたものである。1918年論文では、αの大幅な書き換えがなされているが、そこでは依然として『メールヒェン』と『美的書簡』との構図的一致が強調されている[41]。1918年時点でシュタイナーがαの加筆を行う際、彼自身の思想的発展を踏まえて、解釈の変更を行うことは可能だったはずである。しかしながら、彼は、シラー的二元論による解釈を保存した。この事実により、転回前夜の構図は、根本構図として一貫して彼の思想を支え続けているということが示されるのである。

従ってβで詳細に示された諸々の分析は、あくまでもαで提示された総論に対する各論とみなすべきである。例えば4－3で検討した、四人の王に関する分析について、βでは、金、銀、銅、三人の王はシュタイナー独自の人間観と結びつき、霊我、生命霊、霊人として読み解かれていた。そうした解釈は極めて特異であるが、αだけでなく、βでも、三人の王は同時に、思考、感情、意志の象徴として解釈されていた。これにより、霊我、生命霊、霊人をめぐる問題は思考、感情、意志の問題に置換可能なものとして浮かび上がってくる。我々の常識的観点からすれば、シュタイナーの人間観は、容易に接近できるものではない。しかしながら、「メールヒェン論」を経由してその問題を思考、感情、意志の問題として翻訳することにより、彼の人間観は我々にとって十分に接近可能なものとして立ち現れてくることとなる。

「メールヒェン論」αとβ双方で論じられていた共通項を列挙すると以下の七ポイントに要約可能である。この七項が、シュタイナーの人間形成論を支える基本構図となる。

① 人間形成の過程は、超感覚的世界から離反した我々が、再びその世界との関係を取り結ぶ行程である。
② 自由獲得のためには超感覚的世界と再びつながりなおす必要がある（感覚的世界の原理＝因果律に縛られていては自由の獲得は不可能である）。
③ 自由を獲得するためには、低次の自己が死滅せねばならない。感覚的世界を生きる自己は変容を迫られ

る（自己変容）。

④ しかしながら、低次の自己の死は、感覚的世界の否定を意味しない。それは感覚界とより深く関わるための一時的離反にすぎない（「死して成れよ」）。

⑤ 自己変容のための準備として、我々は「学識＝知恵 Weisheit」（とりわけゲーテ自然科学の知）を必要とする。

⑥ 「学識＝知恵 Weisheit」（ゲーテ自然科学の知）の十全な蓄積により、超感覚的世界への道が拓かれる。

⑦ 超感覚的な原理との合一（自由の獲得状態）により、それ以前には我々のうちで混在していた思考、感情、意志が独立を果たす（高次の自己の誕生）。

αとβの比較により、シュタイナー人間形成論を貫流する根本的要素が浮き彫りになった。上記の基本構図を確認しておくことは、彼の人間形成論を論ずる上で不可欠であるように思われる。

我々はともかくも、シュタイナー思想に接近する上で、一度上記の観点の前で立ち止まり、彼の人間形成論を支える構図を捉えておくべきである。本研究で整理した観点は、シュタイナー思想を理解する上での足場を与えるものにすぎないが、彼の思想をゲーテを通じて整理することで、その基本構図が把握可能になったように思われる。

6．おわりに

シュタイナーの物語解釈の変遷をみていくことで、本研究が試みたのは、彼自身の思想構造を浮き彫りにすることであった。シュタイナーのゲーテ解釈は、単なる一つの文学論ではない。そこには彼独自の人間形成論のプロトタイプが映し出されているのであり、その変遷を追い、そこに一貫して潜在する基本構図を抽出することは、即ち、人智学的思想の根本理念の解明と同義なのである。

さて、こうしたシュタイナーの『メールヒェン』解釈は、彼の『ファウスト』解釈とも密接に関連している。本論考で論ずることはできないが、「ファウスト論」を併せて検討することにより、ゲーテを通じて、人智学的諸理念がより広範に明らかになると考えられる。彼の『ファウスト』解釈については、別稿「シュタイナーの『ファウスト』論 ── 『ファウスト』解釈に秘められた「自由」の哲学 ──」、及び「ゲーテ『ファウスト』の神智学的解明 ── シュタイナー人間形成論の縮図」を用意している[42]。「ファウスト論」のうちにも、本論考で明らかにした人智学的人間形成論の基本構図が鮮明に現れ出ている。「メールヒェン論」、「ファウスト論」、両者に配視することで、シュタイナー思想が多角的に考察可能となるはずである。

✣註

1）新田によれば、『神秘劇』は、ゲーテによって観照された世界を、そこに辿りつく人類の歩みを背景にしながら、個人の体験を中心に据えて描き出したものであるという。［シュタイナー，R.　1982：（新田義之訳）『神秘劇Ⅰ』、人智学出版社、訳者解説、195頁］

2）Paul Marshall Allen & Joan Deris Allen 1995: *The Time Is at Hand!: The Rosicrucian Nature of Goethe's Fairy Tale of the Green Snake and the Beautiful Lily and the Mystery Dramas of Rudolf Steiner,* Rudolf Steiner Pr., USA, p. 55.

3）井藤元　2009：「シュタイナーのゲーテ『メールヒェン』論 ── ゲーテ、シラー、シュタイナーの思想的邂逅 ──」、『ホリスティック教育研究』、第12号、ホリスティック教育協会

4）尚、筆者はシュタイナーの思想史的定位を目指し、別稿において、ニーチェとの関連でシュタイナーの思想史的検討を試みた。そこでは、シュタイナーがニーチェをいかに読み解いたかを分析することを通じて、シュタイナー自身の思想構造を明らかにすることを目指した。［井藤元　2008：「シュタイナー「ニーチェ論」の思想史的検討 ── 試金石としてのニーチェ ──」、『臨床教育人間学』、第9号、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座］

5）Steiner, R. 1965 :Die Okkulte Grundlage in Goethes Schaffen, In:*Philosophie und Anthroposophie,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S. 38.

6）Steiner, R. 2000: *Mein Lebensgang: eine nicht vollendete Autobiographie; mit einem Nachwort hrsg. von Marie Steiner (1925),* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S. 391. = 2009：（西川隆範訳）『シュタイナー自伝（下）』、アルテ、125頁、一部改訳

7）Steiner, R. 2003: *Grundlinien einer Erkenntnistheorie der Goetheschen Weltanschauung mit besonderer*

Rücksicht auf Schiller, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S. 11.

8）シュタイナーは最初期の著作『ゲーテ的世界観の認識論要綱』において、次のように述べている。「今日それ[『ゲーテ的世界観の認識論要綱』　註：筆者]を再び私の前に置くと、それはまた、私がのちに語り、出版してきたすべてのことの認識論的基礎づけであり、弁明であるように思われる」。[*Ibid.*]

9）シュタイナー自身、『メールヒェン』の難解さについて次のように述べている。「このメールヒェンのイメージに働きかけられて、これは謎だ！といわない人がいるであろうか。初めのうち我々は、このメールヒェンの中で生きているものを、ほんの少しだけしか感じません」。[Steiner, R. 1999a: Goethes geheime Offenbarung exoterisch, In: *Goethes geheime Offenbarung in seinem Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S. 226.]

10）そもそも、ゲーテは彼の諸々の自然科学論文において、有機体の認識については分析を行ったが、人間の自己認識の問題について積極的に議論を展開しなかった。しかしながら、ゲーテは論理的形式で論ずることはなかったものの、そうした問題については彼の文学のうちに記されているとシュタイナーは考えた。彼は自伝において、以下のように述懐している。「八十年代以降、この『メールヒェン』と結びついたイメージが、私の心を捉えていた。外部の自然の観察から人間の心の内部へと到る方法を、ゲーテは概念によってではなく、イメージによって表現していた。私は『メールヒェン』の中に、こうしたゲーテの方法が書き込まれていることに気付いた」。[Steiner 2000, S. 391. = 1983：(伊藤勉・中村康二訳)『シュタイナー自伝Ⅱ』、人智学出版社、179 頁.]

11）*Ibid.,* S. 182. = 1982：(伊藤勉・中村康二訳)『シュタイナー自伝Ⅰ』、人智学出版社、184 頁

12）Allen 1995, p. 37.

13）『美的書簡』における「遊戯衝動」の内実については拙稿を参照。[井藤元　2007：「シラー『美的書簡』における「遊戯衝動」── ゲーテ文学からの解明 ──」、『研究室紀要』、第 33 号、東京大学大学院教育学研究科教育学研究室　及び　井藤元　2008：「『崇高論』によるシラー美的教育論再考 ── シラー美的教育論再構築への布石 ──」、『京都大学大学院教育学研究科紀要』、第 55 号、京都大学大学院教育学研究科]

14）Steiner, R. 1999b: Goethes geheime Offenbarung, In: *Goethes geheime Offenbarung in seinem Marchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz

15）Steiner, R. 1999c：Das≪Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie≫von Goethe, In: *Goethes geheime Offenbarung in seinem Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S. 120.

16）*Ibid.*

17）シュタイナーによれば、物質界、魂界、精神界は互いに空間的に離れているわけではない。「わたしたちが生きているこの空間のなかに、アストラル界も存在するのである。わたしたちは物質界に生きていると同時に、アストラル界と精神界のなかにも生きている。わたしたちがいるところには、どこでも三つの世界が併存しているのである」。[Steiner,R. 1991: *Vor dem Tore der Theosophie,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S. 21. = 1991：(西川隆範訳)『神智学の門前にて』、イザラ書房、23 頁]

18）Steiner, R. 1978: *Theosophie Einführung in übersinnliche Welterkenntinis und Menschenbestimmung,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, SS. 26-27. = 2000：(高橋巌訳)『神智学』、筑摩書房、32 頁、一部改訳

19）エミヒョーベン，F.W.　1980：(伊藤勉訳)『ルドルフ・シュタイナー』、人智学出版社、128-129 頁

20）Steiner 1978, S. 28. = 2000、34 頁

21）Steiner 1999c, S. 121.

22）*Ibid.,* S. 122.

23）*Ibid.,* SS. 248-249.

24）*Ibid.,* S. 248.

25）Steiner, R. 1999d: Goethes «Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie», In: *Goethes geheime Offenbarung in seinem Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz, S. 112.

26）高橋義人　1988：『形態と象徴』、岩波書店

27）Steiner 1999d, S. 112.

28）そうした変容の過程をシュタイナーは錬金術的過程として捉えられていた。「現存在のある段階から、より高次の段階への人間の変容。それはゲーテが解決しようとした謎であった。その謎とは、日常で暮らしている人、ただ目でしか見ることができず、ただ耳でしか聞くことができない人が、いかにして「死してなれ！」ということを理解できるかであった。これは、すべての時代の神秘主義者達にとっての問題であった。すべての時代に、この偉大なる問いは精神的錬金術と呼ばれた」。[Steiner 1999d, S. 97.]

29）Steiner 2000, S. 333.

30）ところで、百合姫の国を精神の国の象徴として読み解くということは、根拠なき解釈ではない。シュタイナー

によれば、百合は錬金術師たちがデヴァカンのシンボルとしたものである。そして人間は、この百合姫の国を闘い取るライオンとみなされる。[Steiner 1999b, S. 121.] 錬金術のモチーフとなる百合とライオンのメタファーは、『ファウスト』第一部における、錬金術師についての言及の際にも示されている。「まず大胆な求愛者の「赤い獅子」をなまぬるい湯舟のなかで「ゆり姫」とめあわせる。それから、新婚夫妻に燃えあがる焔をふきつけて、「闇」から「闇」へ追いまわす」。[Goethe, J.W. 1974: *Faust Erster Teil,* Insel Verlag, Frankfurt am Main und Leipzig, S. 51. = 1960：(大山定一訳)『ゲーテ全集　第二巻　ファウスト』、人文書院、35頁]

31) Steiner 1999d, S. 99.

32) *Ibid.,* S. 105.

33) Steiner 1999c, S. 124.

34) Steiner 1999a, S. 223.

35) Steiner 1999c, S. 127.

36) *Ibid.,* S. 123.

37) Steiner 1999a, S. 242.

38) Steiner 1999d, S. 106.

39) Steiner 1999a, S. 242.

40) Steiner 1999c, S. 123.

41) Steiner, R. 1999e: Goethes Geistesart in ihrer Offenbarung durch sein «Märchen von der grünen Schlange und der Lilie», In: *Goethes geheime Offenbarung in seinem Märchen von der grünen Schlange und der schönen Lilie,* Rudolf Steiner Verlag, Dornach, Schweiz.

42) 井藤元　2010：「シュタイナーの『ファウスト』論――『ファウスト』解釈に秘められた「自由」の哲学――」、『京都大学大学院教育学研究科紀要』、第56号、京都大学大学院教育学研究科　及び　井藤元　2010：「ゲーテ『ファウスト』の神智学的解明――シュタイナー人間形成論の縮図」、『ホリスティック教育研究』、第13号、ホリスティック教育協会

本研究は平成21年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の助成を受けたものである。

（いとうげん　京都大学大学院教育学研究科博士後期課程／日本学術振興会特別研究員）